

旭国民学校時代

昭和十六年四月一日、学制改革により旭国民学校となり、初等科六年、高等科二年が置かれた。この年、日本は太平洋戦争に突入し、まさに軍事一色となった時代である。国定教科書が改定された。

国民学校では、特に体操科並びに団体訓練を重視し、県視学は毎年学校を巡回して指導にあたったが、旭には同十八年十一月に中込視学委員が訪問した。登校は集団登校で、一年生から六年生まで整然と整列して登校し、奉安庫前では全員整列し再敬礼した。

廊下には木銃や木刀が備え付けられ、体操科の時間に使われた。四大節（四方拝、紀元節、天長節、明治節）には全校登校し、宮城遥拝をして教育勅語を聞き、帰りには紅白の饅頭をいただいて帰宅した。

同十七年ともなると、戦況いよいよ厳しくなり同十九年には遂に本土決戦を強いられる事態に至った。学校の校庭南東には防空壕が掘られ、村にも家族単位の疎開があった。高田、尾岐には多数の児童が集団疎開してきた。

万一空襲の時は、目、耳、鼻を指で抑え、地べたに臥すように教えられた。また、担任が次々と応召し、一人の先生が代わるという異常事態があった。

生活物資の大半は戦地に送られ、「欲しがりません、勝つまでは」のスローガンの下、国民は極端な耐貧生活を強いられた。食糧増産のために校庭まで掘り起こして南瓜やサツマイモなどを作った。それでも子供たちは、明るく我慢強かった。

敗戦、そして

昭和二十年八月十五日、終戦を迎え、日本の教育は大きく変わること

となった。羅針盤を失った国民はまるで難破船のように、ただ食を求めて漂流する格好となったが、国民の勤勉さが新生日本を作る大きな力となった。

同二十年九月には、戦時的教材を墨で塗りつぶすよう指示が出され、教師も児童も複雑な思いを持って作業をした。代わって新聞大の「折本教科書」が配布され、八等分して和綴りにして使用した。それまでの日本歴史、修身、地理は授業停止となり、教科書の回収がはかられた。

同二十一年には、奉安庫に格納されていた御真影と教育勅語、詔書を教育事務所に返納し、戦中教育は完全に終わりを告げた。

同二十二年三月三十一日、教育基本法と学校教育法が制定され、ようやく進むべき道筋が定められた。

翌日四月一日、旭小学校と改称され、新しい制度のもとで、新しい教科書を使って、新しい教育が始まった。

義務教育が六・三制の九年になり、それまで男組・女組の男女別学から男女共学となった。旭小学校でも女子の活発さが目立ってきた時期であった。この年の在校生は、引揚者もあつたりして、旭小学校歴史上で最多の四百九十四人。

【『旭小学校閉校記念誌』より転載】